

## 明代の都市杭州を描いた紀行文について

### —— 策彦周良『入明記』と中国文人による日記との比較を中心に ——

二松學舎大学非常勤講師 植松宏之

#### 一. はじめに

##### ◆自然と都会の美を兼ねる

北宋の歐陽修は「有美堂記」<sup>1</sup>の中で杭州を、都市としての繁華な様子と、西湖を中心とした自然景觀の美しさを兼ね備えた、数少ない都市の一つであると述べている。

夫れ天下の至美と其の樂とを挙ぐるに、兼ねて得ざるもの多く有り。故に山水登臨の美を窮むる者は、必ず寛閑の野、寂寞の郷に之きて後得るなり。人物の盛麗、都邑の雄富を誇るを覽る者は、必ず四達の衝、舟車の会に據りて後足れり。蓋し彼れ物外に心を放ち、此れ繁華に意を娛しむ。二者各の適するところ有り。然れども其の樂しむと為すは、兼ねるを得ざるなり。〈中略〉若し乃ち四方の聚まる所、百貨の交わる所、物盛んに人衆く、一都会為りて、又能く兼ねて山水の美有り、以て富貴の娛しみに資する者は、惟だ金陵、錢塘のみ。〈後略〉。

夫拳天下之至美与其樂、有不得而兼焉者多矣。故窮山水登臨之美者、必之乎寛閑之野、寂寞之郷而後得焉。覽人物之盛麗、誇都邑之雄富者、必據乎四達之衝、舟車之会而後足焉。蓋彼放心於物外、而此娛意於繁華。二者各有適焉。然其為樂、不得而兼也。〈中略〉若乃四方之所聚、百貨之所交、物盛人衆、為一都会、而又能兼有山水之美、以資富貴之娛者、惟金陵、錢塘。〈後略〉。(歐陽修「有美堂記」)

- ①山水の「美」と都会の「樂」は人の心を満足させるが、「美」と「樂」の両者を兼ねることは難しい
- ②天台・洞庭・三峽など具体例を挙げ「東南」地方の著名な自然景觀は皆辺鄙な土地にあると指摘
- ③大都会でありながら山水の美も兼ね備える所は、ただ「金陵」(南京)と「錢塘」(杭州)だけである
- ④有美堂は二つの美を兼ねる事のできる、杭州城内<sup>2</sup>の南に位置する呉山に建てられた。

呉山・城隍廟から市街を望む



呉山・城隍廟から西湖を望む



<sup>1</sup> 洪本健校箋『歐陽修詩文集校箋』居士集卷四十(上海古籍出版社、二〇〇九 中国古典文学叢書)。有美堂は杭州知府であった梅摯(梅公)によって城内の呉山山頂に建てられた。江寧知府(南京)に移った梅摯からの要請によって「有美堂記」が作られた。ここで、杭州と南京を特に評価したのは、梅摯の任地との関係もあるだろう。

<sup>2</sup> 城壁や城壁によって囲まれている都市のことを「城」という。中国の多くの都市はかつて周囲を城壁によって守っており、いくつかの城門だけが出入り口となっていた。都市の中は「城内」、都市の外を「城外」となる。

◆杭州・西湖・京杭運河について

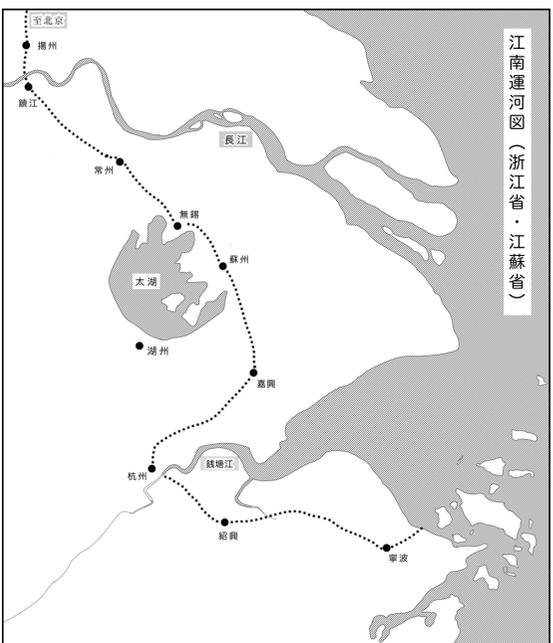
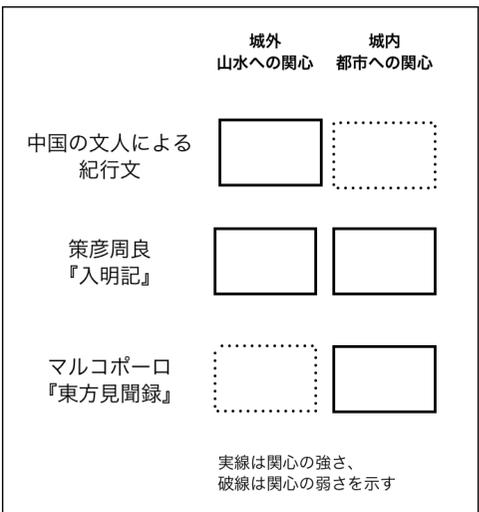
浙江省の省都である杭州は杭嘉湖平野の南端に位置し、都市の東南を杭州湾へと通じる大河、錢塘江が流れている。また、市街のすぐ西側にある湖を西湖といい都市の生活と密接不可分な関係にある。隋代に都との間を結ぶ大運河の終着点となり、錢塘江を挟んで寧波へと至る浙東運河と連絡する交通の要衝として繁栄を始め、呉越国及び南宋の時代には首都となった。明清時代も絹織物、茶の生産などで発展し、蘇州と並んで江南を代表する大都市であった。清末以降は上海の隆盛によって相対的に地位が低下したが、現在でも産業・観光の面から有力な都市の一つとなっている。二〇一一年には「杭州西湖文化景觀」がユネスコの世界遺産に登録された。また、現在北京から杭州までを結んでいる「京杭運河」も二〇一四年に世界遺産に登録された。策彦周良ら入明使節も運河を利用して寧波から杭州を経過し、都の北京へと向かっている。

◆杭州・西湖と古典文学との関わり

杭州は隋代に造られた大運河の終着点となって以降、交通の要衝として多くの人々が行き来し、この地域の都市の中心として栄えてきた。杭州を訪れた役人や文人たちは都市のすぐ西側に位置する美しい湖、西湖の景観を愛し、西湖や周囲の山々、またそこに点在する寺廟をたずねては詩を詠んだり、文章を書き記すなどしてきた。なかでも、杭州や西湖と関わりの深い詩人としては唐の白居易（白樂天）と北宋の蘇軾（蘇東坡）の二人が挙げられるだろう。たとえば白居易は「憶江南」（江南を憶う）で「江南を憶う 最も憶うは是れ杭州（憶江南、最憶是江南）」と詠っている。

◆自然の景観への興味

漢詩等の韻文学作品のほか散文作品である紀行文についても、「山水遊記」という呼称があるように、中国文人の関心は都市ではなく主に自然の景観にあった。そのため都市の「繁華」な様子について具体的に記した記述は多くない。ただ、杭州に関しては南宋時代に都（臨安）が置かれたため、都市の様相を記した呉自牧『夢梁錄』など幾篇かの作品がある。それ以降は明代清代を通して都市についての総合的な記述はほとんど残されていない。<sup>3)</sup>



<sup>3)</sup> 明代に作られた西湖に関する総合的地志としては田汝成『西湖遊覽志』があり、以降西湖に関する著作が続々と刊行されていく。『西湖遊覽志』中にも都市内の官庁、橋梁、樓閣についての紹介はあり参考になる。また、清末に丁丙『武林坊巷志』が編纂され、杭州城内についての資料は網羅的に集められた。都市の様子を探る上でも非常に参考になるが、商店や商品などについての記載は『夢梁錄』からの引用が多い。

#### ◆自然の景観と都市の繁華、双方への関心

元代の中国に滞在した際の旅行記であるマルコ・ポーロ（ヴェニスの人）の『東方見聞録』には、杭州の様子も描かれている。マルコ・ポーロは整備された運河や石橋、大きな官庁や店舗など都市内部の繁華な様子に関心を寄せていた。西湖についても市民の優雅な生活を示すものとして記述されている。その一方で中国の紀行文であればほぼ必ず触れられる寺院等については具体的な記述はなく、関心の対象外であったようだ。

それに対し日本の室町（戦国）時代に杭州を訪れた策彦周良は、中国の山水遊記と同じように西湖やその周辺の寺院への関心を示す一方、都市内の様子についても詳細に記している。中国の伝統的な文学観と外国人としての市街への興味の双方を兼ね備えているといえるだろう。

## 二． 策彦周良の『入明記』と杭州

### 二．一

#### ◆策彦周良と『入明記』<sup>4</sup>

（二五〇一～一五七九）は室町時代後期、臨済宗の禅僧。大内義隆に要請されて遣明船の使節として二度、明に渡った。また策彦周良は碩学の僧として、戦国大名の武田信玄や織田信長にも信任された。明に渡った時につけた日記、『初度集』（天文八年・明の嘉靖十八年（一五三九）副使として渡船）、『再渡集』（天文十六年・明の嘉靖二十六年（一五四七）正使として渡船）が残っている。明との外交上のやりとりのほか、交通や文化についても事細かに記されており、中国の文人とは異なる視点で書かれている。

### 二．二 都市への関心

#### ◆杭州入城の拒否と「寧波の乱」

室町時代に明との間で行われた勘合貿易では、日本から出航した遣明船はまず浙江省の寧波に到着した。寧波は遣唐使船も上陸先として目指した古くからの港町であった。使節団はここから運河をたどって皇帝のいる北京まで主に船で旅をすることになる。運河の結節点にあたる杭州は日本の使節が必ず通過する都市の一つだった。

嘉靖十八年（一五三九）十月二十八日に策彦周良ら使節団は錢塘江を渡って杭州府に到着する。一行は有名な杭州での観光を楽しみにしていたはずだが、翌二十九日、杭州へは入城せず城壁の東を流れる運河に沿って、そのまま北上するようにとの命令が杭州府の役所から発せられる。

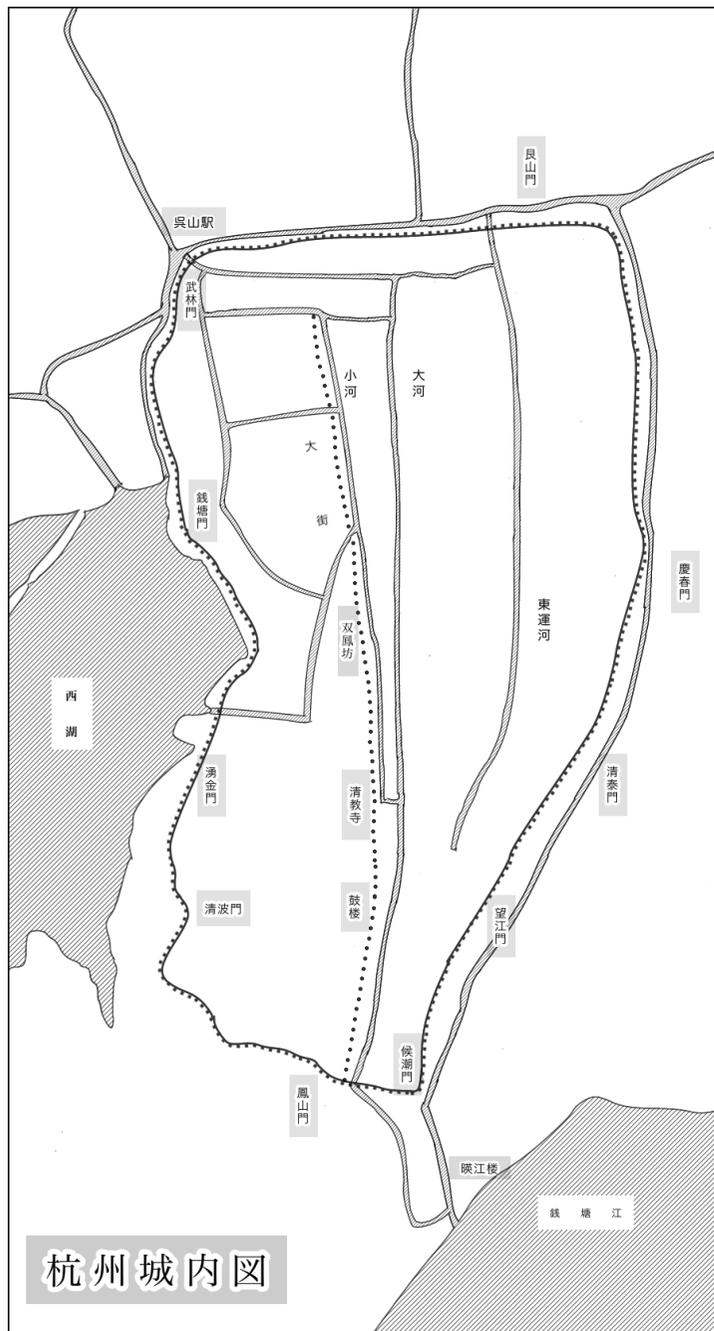
これは前回遣明船がやって来た際の寧波の乱が影響している。応仁の乱のち室町幕府の力は弱まり、莫大な富をもたらす貿易の主導権を巡って大内氏と細川氏が争っていた。その争いの中、嘉靖二年（一五二三）大内氏と細川氏の船団は寧波で武力衝突をおこし、明の軍隊や周辺の村落までが大きな被害を受けた。この事件のあと明は日本の使節を受け入れる事になったが、警戒の目は厳しかった。そのため策彦周良らの遣明使節は、大都市である杭州への入城を許されなかった。翌日の十一月一日、日本側は入城を求める手紙を送って嘆願する。

わたくし達は、自分の国にいた時、杭州・西湖のどこにもない美しさについて耳にしています。ほんの片時の時間もいつも杭州のことを考えていました。わたくし達を以前の規定に従って杭州府に入らせて下さい。もし許諾を頂けないと、日本の一行は大変に失望してしまいます。

<sup>4</sup> 牧田諦亮『策彦入明記の研究』上下（法蔵館、一九五九）を参照。テキストもここから引用した。入明記と杭州との関わりについては、村井章介『日明関係史研究入門——アジアの中の遣明使』（勉誠出版、二〇一五）第三部「遣明使節の旅」（須田牧子）、「各論⑧」杭州西湖（堀川貴司）、「特別展 西湖憧憬—西湖梅をめぐる禅僧の交流と十五世紀の東国文化—」（神奈川県立金沢文庫、二〇一八）を参照。

生等在弊邑之日。仄聞説杭湖之奇絶。而造次顛沛。念茲在茲。生等今欲依前規入本府。不賜許諾。日衆大失望。

\*西湖の景観の美しさが日本にまで伝わっていたことが分かる。この嘆願書が功を奏したためか、結局入城の許可を得ることに成功する。



◆杭州城内の見学 『初渡集』嘉靖十八年（一五三九）「十一月朔（一日）」

（十一月 一日）巳の刻に上陸し、西北の城門から杭州府に入った。杭州府の中を進んでいると、科擧及第を示す門（牌坊）がたくさんあった。「双鳳坊」、「海蛟競起」、「奎璧聯輝」、「世進士坊」、「父子翰林」「振綱肅紀」等の類いで、枚擧にいとまが無い。またのぼり旗の広告もある。「河清老酒」、「金華老酒」、「短水白酒」、「羅浮春」、「洞庭春色」、「上色清香高酒」、「瑤池玉液」、「紫府瓊漿」などの類いでとても記しきれない。また学校があり、門に「小学」の二字が掲げられている。おくにも一つの門があり、横額で「雲程発軫」とある。また寺がある。寺の門は多層になっている。おまけに、まるで高い塔のようである。門の中央に金字で「真教寺」の三字が掲げられている。また店舗がある。看板に「鄭氏涼傘舖」や「清油細傘舖」と書かれている。帽舖・紅舖・銀舖の類いも数え切れない。また「餅」を売っている店がある。木で餅の型を作り、「大白雪餅」と書かれている。また食事を供する店がある。木の看板に「家常大飯」（家庭料理）と書かれている。また門（牌坊）が一つあり、「国医坊」の三字が掲げられている。医者であろうか。二階建ての楼閣がある。横に「鎮海楼」の三字が掲げられている。おそらく水時計の置かれている建物であろう。その下を通り過ぎた。この楼閣の左側には山（吳山）の方に通じる道がある。小さな門があり、「登高覽勝」の四字が掲げられている。この山から西湖を一望できるのだろうか。また城門があり、「武林」の二字が掲げられている。この城門から出ると左側に建物の門があり、横に「北関駐節」と掲げられている。また門があり、縦に「吳山駅」の三字が掲げられている。額には「停驂」の二字がある。その先には石橋があり、橋を過ぎて門をくぐる。横に「湖山一覽」の四字が掲げられている。堂には「皇華」と書かれた額があり、恭川・李崧祥書とある。また堂の後ろにも一つの額があり、横に「三吳勝概」の四大字がある。これもまた李崧祥の書いたものである。少しの間ここで休憩をした。西門から西湖の側を通り、船のある所まで行った。時間は日暮れ時であった。

(十一月朔)已刻。上岸。自西北門入杭府。府中所過。及第門多々有。双鳳坊・海蛟競起・奎壁聯輝・世進士坊・父子翰林・振綱肅紀等之類。不遑枚舉。又帘銘有河清老酒・金華老酒・短水白酒・羅浮春・洞庭春色・上色清香高酒・瑤池玉液・紫府瓊漿等之類不可悉記焉。又有學校。門揭「小学」二大字。裏有一門。橫額「雲程發軔」。又有寺。寺門架以層層華構。猶如層塔。門中央以金揭「真教寺」三大字。又有舖。或刻牌以鄭氏涼傘舖。或以清油細傘舖。帽舖・紅舖・銀舖之類不知數。又有売餅店。以木造餅形。書中以大白雪餅。又有売飯家。有木牌。書以家常大飯。又有一門。揭「國醫坊」三大字。蓋医家歟。有二重樓。橫揭「鎮海樓」三大字。蓋置漏量時之樓也。過其下。出此楼左畔。有路之通翠微。有一小門。揭「登高覽勝」四字。蓋於此一覽西湖也。又有一門。揭「武林」二大字。此出門左畔有門。橫揭「北関駐節」之四大字。又有門。豎揭「吳山駅」三大字。額裏有「停驂」之二大字。次有石橋。過橋入一門。橫揭「湖山一覽」四大字。入堂裡額「皇華」。恭川・李崧祥書。又堂後有一額。橫揭「三吳勝概」四大字。此亦李崧祥所書也。少焉。憩息于此。〈中略〉自西門歷西湖之涯。到船辺。時方及晡。

#### ◆行程

使節団は「西北の門」(武林門か或いは武林水門か)から入り、杭州城を南北に貫く「大街」を北から南へと進み、吳山のふもとにある鎮海樓まで到達したあと、北へ戻り西北の城門武林門から出て、武林門の側にある吳山駅に入った。大街(現在の中山路)は都市を南北に通る杭州の中心的な街路。城内を流れる運河と平行している。南宋時代に都が置かれると皇帝の行幸する道として御道、大街等と呼ばれるようになった。

\*入城を許された後は、使節団は都市の最も中心となる街路を案内されている。

#### ◆詳細な記録

\*役所や城門などの目立つ建物以外にも、様々な商店の建ち並ぶ繁栄した街のすがたが事細かに記述されている。

\*城門、寺院、牌坊に依って行程を推測することができる。

○官署・寺院・城門・鎮海樓など都市を象徴する建築は『西湖遊覽志』等の地志に記載されている。「真教寺」<sup>5)</sup>はイスラム教の寺院のことで、「回回堂」「禮拜寺」などともいう。今は鳳凰寺と呼ばれる。「鎮海樓」<sup>6)</sup>はは城の南、吳山のふもとにある樓閣で、太鼓などで時を知らせるための「鼓樓」としての役割があった。鼓樓のすぐ左側には現在も吳山へ登る小さな道がある。

○坊・門(牌坊)・「坊」は街の街区、その名称。牌坊は鳥居のような形の建築物。標識(街区の境界、名称を示す)、紀念(科挙合格や忠孝節義を称えるなど)、裝飾のために建てられた。牌樓、坊門ともいう。

「双鳳坊」<sup>7)</sup>は明の嘉靖年間、邵経邦、邵経済が兄弟揃って科挙試験に合格し、進士となったことから名付けられた。「世進士坊」は、大街に架かる衆安橋の東に、複数の科挙合格者のために建てられた。<sup>8)</sup>「小学」は南宋時代に学校(小学)が設置された事から名付けられた「小学前」という地名がみられる。<sup>9)</sup>

\*策彦周良は「小学」を学校、「国医坊」を医者であろうかと推測している。これらは坊名(街区名)を

<sup>5)</sup> 『武林坊巷志』第一冊三〇頁

<sup>6)</sup> 『西湖遊覽志』卷十三「鎮海樓」に「鼓鐘を貯え、以て漏刻を司る(貯鼓鐘以司漏刻)」とある。

<sup>7)</sup> 『嘉靖仁和県志』卷一「牌坊」

<sup>8)</sup> 『嘉靖仁和県志』卷一「牌坊」

<sup>9)</sup> 『武林坊巷志』第七冊四九二頁

示したり、人物を表彰のための牌坊と思われる。必ずしも実際に学校等があるわけではない。

杭州・小營巷



西湖湖畔の牌坊「碧血丹心」



○広告・看板・店舗・明の文人による紀行文や『西湖遊覧志』に具体的な名称が載ることは多くない。明代、清代に刊行された白話（口語体）小説は、庶民の生活を描いていて、具体的な商品名なども登場し参考になる。

「鄭氏涼傘舗」「清油細傘舗」は傘を売る店舗。南宋の杭州を舞台とする白話小説「白蛇伝」<sup>10</sup>のなかで「清湖八字橋にある老舗、舒家の作った八十四骨の紫竹柄の高級な傘」という傘が登場する。小説のなかで傘が、主人公の青年許宣と、白蛇の精・白娘子が出会う過程で重要な役割を果たしている。「銀舗」は銀の両替を行う店舗か。主人公である油売りの青年・秦重が稼いだお金（銀塊）を計量する場面に登場する<sup>11</sup>。「餅」は小麦粉などで作った丸くて薄い食べ物の総称。「大白雪餅」の日本の「モチ」とは異なる。「河清老酒」、「金華老酒」、「短水白酒」、「羅浮春」<sup>12</sup>、「洞庭春色」<sup>13</sup>、などはいずれも酒の事を指す。

## 二・三 自然への関心

◆城内の呉山探索 『再渡集』嘉靖二十七年（一五四八）十月十九日

十九日 夜中に、行燈を灯して呉山を登った。忠節坊を通って伍子胥廟を参詣した。琇公・樗也・熊一が一緒であり、釣雲も同行した。また、城隍廟にも参詣した。（それから）鉄仏寺に行き、水利館に到着した。

十九日 宵分。点行燈登呉山。經忠節坊。詣伍子胥廟。携琇公・樗也・熊一。釣雲亦同途。又詣城隍廟。到鉄仏寺、又到水利館。

\*夜は城門が閉じられているため西湖へは行くことができず、時間を惜しんで呉山を探訪する。

◆城外の保叔寺探索 『再渡集』嘉靖二十七年（一五四八）十月廿一日

<sup>10</sup> 小説の成立は明代末期。明・馮夢龍『警世通言』巻二十八「白娘子永鎮雷峰塔」に「清湖八字橋老実舒家做的八十四骨紫竹柄的好傘」とある。

<sup>11</sup> 明・馮夢龍『醒世恒言』巻三「売油郎独占花魁」に「打個油傘、走到對門傾銀鋪裡、借天平兌銀。」とある。この物語も南宋の臨安（杭州）が舞台。

<sup>12</sup> 蘇軾「和章蘇州詩寄鄧道士」に「一杯の羅浮春、遠く採微の客を餉る（一杯羅浮春、遠餉採微客）」とある。

羅浮は広東省惠州の羅浮山のこと、蘇軾が造った酒の名。

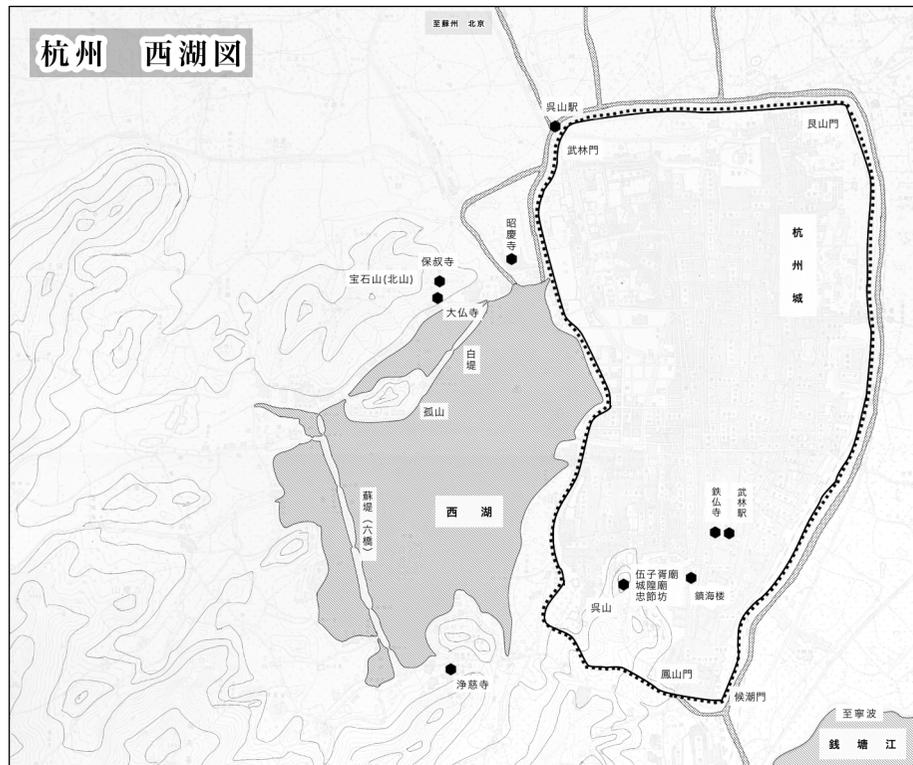
<sup>13</sup> 蘇軾「洞庭春色」の「引」に安定郡王がミカン（黃柑）で酒を造り、それを「洞庭春色」と名付けたとある。洞庭は太湖の浮かぶ島の名前。

二十一日 天候は穏やかであった。北山山頂に登った、すなわち保叔寺である。八角形で七重の塔がある。方丈は傾き倒れており、鐘樓もくずれていて、跡だけが残っていた。仏殿の中に鐘が掛かっている、祖堂は荒廃していた。本尊の前に開山の善導和上の木像が置いてあった。錦欄の伽梨ぎやりを着ていた。

廿一日 天気佳暄、登北山山頂。乃保叔寺也。有八角七重塔。方丈傾倒。鐘樓亦倒却。只存遺址。掛鐘於仏殿裡、祖堂荒廢。本尊前按開山善導和上木像。著錦欄伽梨。



保叔塔 寶石山(北山)



◆城外の西湖探索 『再渡集』嘉靖二十七年(二五四八)十月晦日(三十日)

三十日 朝早くに駅を出て、西湖に遊んだ。北山のふもとから小舟に乗り、最初に浄慈寺に行った。宗鏡堂の後ろの永明室内で食事をした。(その後)六橋を通って、諸寺を巡った。浄慈寺から始まり、最後は大仏寺であった。帰りはまた北山の山頂を進み、再び保叔寺に遊んだ。そこで詠んだ詩を記す<sup>14</sup>「北山山頂 中条に倚り、佳境何ぞ辞せん 磴路遙かなり、白日僧は稀なり 黄葉の寺、塔鈴響きは前朝を説くが似し」<sup>15</sup>

晦日 戴星出本駅、遊西湖。自北山々下乘扁舟。第一到浄慈寺、於宗鏡堂后永明室内下飯。經六橋、歴覽諸寺。始于浄慈。終于大仏寺。取歸途於北山山頂。再遊保叔寺。偶記前題。北山山頂倚中条、佳境何辞磴路遙、白日僧稀黄葉寺、塔鈴響似説前朝。

\*城内の呉山や城外の西湖のほか保叔寺(保叔塔)、浄慈寺などは中国の文人たちが多く訪れた場所であり、詩文も多く残っている。

<sup>14</sup> 倚中条・鄭谷「贈日東鑑禪師」に「故国無心にして海潮を渡る、老禅の方丈中条に依る」とある。日東は日本を指す。鑑禪師については不詳。中条は山西省にある山(山脈)の名。なお、この詩は『三体詩』に採られている。

<sup>15</sup> 塔は「保叔塔」と書く。荒廃と復興をくりかえしており、嘉靖二十二年、僧の永果によって重建されている。(『西湖遊覧志』卷八)『国訳一切経 和漢撰述部 史伝部』二十五所収、久保田量遠訳『策彦和尚入明記』の「解題」(六、再渡入明記)に保叔寺の訪問について触れている。

### 三、明代の中国文人による杭州・西湖の旅

◆高攀龍『武林遊記』<sup>16</sup> 万曆十八年（一五九〇）八月一日から八月二十六日までの日記体紀行文。作者は高攀龍（一五六二—一六二六）。字は存之、又は雲從、号は景逸。無錫（今の江蘇省無錫）の人。万曆十七年の進士。『明史』卷二百四十三に列伝がある。顧憲成とともに無錫の東林書院で講学をおこない、海内の士大夫から「高顧」と称された。当時権勢のあった宦官の魏忠賢によって東林党の士人は迫害を受け、高攀龍も自ら池に身を投げて命を絶った。崇禎年間に忠憲と諡された。著作に『高子遺書』十二巻などがある。

#### ◆杭州での路程

八月一日に蘇州の閶門から旅を開始する。五日に平湖（浙江省平湖）に到る。高攀龍は平湖にいる知人に会うため杭州への直通ルートはとらなかった。その後、今まで海を見たことがないので海を見たいという理由で杭州湾に面した都市、乍浦に向かう。そこから平湖に戻り、嘉興を経由し、九日に崇徳に宿泊する。十日に塘棲を経て、十一日に杭州に到着する。そのまま西湖の北側の湖畔に位置する昭慶寺に宿をとり、十一日から十四日まで船を雇い蘇堤、浄慈寺、大仏寺など西湖とその周辺を遊覧する。十五日、「西湖の周りにはもう歩き回ったので、（西湖の西の）南山北山を目指すことにする」（湖境已涉、遂屈指南北山）と、靈隱寺や天竺寺などに足をのばす。十六日、城内にある景勝地、呉山に向かう。この日はじめて都市のなかに入ったか。十七日は雨のため外出できなかった。十八日は錢塘江沿いに建つ六和塔を訪れ、錢塘江の逆流を見ようとする。十九日に帰る準備をはじめ。城内にある書店を訪れる目的のためか、涌金門から城に入り、城内を歩いておそらく武林門から城外に出る。二十五日に蘇州に到着する。

\*【行程】城内の呉山や城外の浄慈寺、蘇堤、大仏寺などを訪れ船に乗って湖内を遊覧するなど、策彦周良が訪れた場所はおおよそ巡っている。

\*策彦周良と比べて旅程に余裕があるため、靈隱寺など更に遠方まで足をのばしている。

\*西湖周辺からはじまり、次に南山北山、続いて城内の呉山、錢塘江と典型的な行程をたどっている。この順序は西湖を対象とする地志、『西湖遊覧志』の配列（孤山にはじまり、錢塘江に終わる）とほぼ同一であり、典型的な観光コースといえる。

\*【山水への興味】十一日に杭州に到着した際には、「私はすぐに西湖の姿が見たかったので、日が暮れようとしていたが、雨が止みそうだったので、履物をはいて湖へ向かい、ゆっくりと蘇堤を散歩した（余急欲顔色西湖、日将晡、雨小止急、素履至湖濱、徐步蘇堤。）」とあわただしく出かけており、西湖への強い思いが感じられる。

\*【都市への興味】都市の繁華な様相についても、「城内の市街の繁華な様は、金陵（南京）以下比べるものが無い（城中闐闐之盛、自金陵而下無其比。）」、「（呉山から街を）見下ろすと家々がすきまなく軒を連ね、街路は非常ににぎやかで、栄えている様子が分かる（従高下瞰、万戸鱗櫛、市声樵沓、耳目俱勝）」と触れてはいるが、都市の繁盛を記す際の定型的な表現を用いているのみで、店舗や看板などの具体的な記述はまったくない。関心の中心は山水の風景や、寺廟にあると考えられる。

<sup>16</sup> 『武林掌故叢編』第十六集（国風出版社本 第八冊所収）

#### 四. おわりに

\* 中国の古典文学において、紀行文「遊記」のことを「山水遊記」とも表すように、紀行文学の関心は都市を離れた山岳や水辺にあった。杭州を中心に書かれた紀行文であっても、山水に関心の対象があることは変わらなかった。

\* 策彦周良『入明記』は、当時の先進的な地域である明朝を訪れた外国人として、道中や都市の中で見た商品や看板の名称が事細かに文字（漢字）によって記録されていた。これらは中国人にとってはいつでもどこにでもある身近で当たり前の存在であった。中国の文人、高級官僚達にとっては関心の外にあり、あまり記録されることはなかった。

\* 一方で漢文学に精通した策彦周良は西湖とその周囲に点在する寺院に大きな関心があり、西湖への探訪を切望していた。詩作も山水や寺院に関わるものであり、街の様子を詩に詠んでいるわけではない。こうした点から、中国の文人と文学に関して共通する感覚を持っていたと考えられる。